

芥川龍之介

芋
粥



芋

粥

元慶がんぎようの末か、仁和にんなの始にあつた話であろう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めていない。読者は唯ただ、平安朝と云いう、遠い昔が背景になつていると云う事を、知つてさえいてくれれば、よいのである。——その頃、摂政せつしょう藤原基経もとつねに仕えている侍の中に、某なにがしと云う五位ごいがあつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちやんと姓名を明あきらかにしたいのであるが、生憎あいにく旧記には、それが伝わって

ない。恐らくは、實際、伝わる資格がない程、平凡な男だったのであろう。一体旧記の著者などと云う者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがう。王朝時代の小説家は、存外、閑人ひまじんでない。——とにかく、撰政藤原基経に仕えている侍の中に、某と云う五位があつた。これが、この話の主人公である。

五位は、風采ふうさいの甚はなはだ揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下っている。口髭くちひげは勿論薄い。頬ほおが、こけているから、頤あごが、人並はずれて、細く

見える。くちびる唇は——一々、数へ立てていれば、際限はない。我五位の外貌がいぼうはそれ程、非凡に、だらしなく、出来上っていたのである。

この男が、何時いつ、どうして、基経に仕えるやうになつたのか、それは誰も知っていない。が、余程以前から、同じような色の褪さめた水干すいかんに、同じような菱なえなえ々した烏帽子えぼしをかけて、同じような役目を、飽あきずに、毎日、繰返している事だけは、確である。その結果であろう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思われぬ。 (五位は四十を越していた。) その代り、生れ

た時から、あの通り寒むそうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路すざくおおじの衢風ちまたかぜに、吹かせていたと云う気がする。上かみは主人の基経きけいから、下しもは牛飼の童児どうじまで、無意識ながら、ことごとく悉ことごとく、そう信じて疑う者が無い。

こう云う風采そなを具えた男が、周囲から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことであろう。侍さむらいどころ 所ところにいる連中は、五位ごいに対して、殆どほとん蠅程はえの注意も払わない。有位ういむい無位むい、併あわせて二十人に近い下役げやくさえ、彼の出入りではいには、不思議な位、冷淡れいたんを極きわめている。五位が何か云いつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等

にとつては、空気の存在が見えないように、五位の存在も、眼を遮かざらないのであるろう。下役でさえそうだとすれば、別当とか、侍所の司つかさとか云う上役たちが頭から彼を相手にしないのは、寧むしろ自然すうの数である。彼等は、五位に対すると、殆ど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後うしろに隠して、何を云うのでも、手真似てまねだけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。従つて、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだ、と思つているらしい。そこで彼等は用が足り

ないと、この男の歪ゆがんだ揉烏帽子もみえぼしの先から、切れかかった藁草履わらぞうりの尻まで、万遍なく見上げたり、見下おろしたりして、それから、鼻で晒わらいながら、急に後を向いてしまう。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、臆病な人間だったのである。

ところが、同僚の侍たちになると、進んで、彼を翻弄ほんろうしようとした。年かさの同僚が、彼れの振わない風来を材料にして、古い洒落しやれを聞かせようとする如く、年下の同僚も、またそれを機会にして、所謂興言利口いわゆるきようげんりこうの練習を

しようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲ひんしつして飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇くちの女房と、その女房と関係があつたと云う酒のみの法師とも、屢しばしば彼等の話題になつた。その上、どうかすると、彼等は甚はなはだ、性質たちの悪い悪戯いたずらさえする。それを今一々、列記する事は出来ない。が、彼の篠枝ささえの酒を飲んで、後へ尿いばりを入れて置いたと云う事を書けば、その外は凡およそ、想像される事だらうと思う。

しかし、五位はこれらの擲揄やゆに対して、全然無感覺で

あつた。少くもわき眼には、無感覺であるらしく思われた。彼は何を云われても、顔の色さえ変えた事がない。黙って例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をしてすましている。唯、同僚の悪戯が、嵩じすぎて、鬣まげに紙切れをつけたり、太刀たちの鞘さやに草履を結びつけたりと、彼は笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは」と云う。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時或いじらしさに打たれてしまふ。(彼等にいじめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが——多数の誰か

が、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めている。）
——そう云う気が、おぼろ朧げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで来るからである。唯その時の心もちを、何時までも持続ける者は甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは丹波たんばの国から来た男で、まだ柔かい口髭が、やつと鼻の下に、生えかかった位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位をけいべつ軽蔑した。ところが、或る日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云う声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、

この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るようになつた。栄養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害にべそを搔かいた、「人間」が覗のぞいているからである。この無位の侍には、五位の事を考える度に、世の中のすべてが急に本来の下等さを露あらわすように思われた。そうしてそれと同時に霜げた赤鼻と数える程の口髭とが何となく一味の慰安を自分の心に伝えてくれるように思われた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。こう云う例外を除けば、五位は、依然として周囲の軽蔑

の中に、犬のような生活を続けて行かなければならなかった。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍あおにびの水干と、同じ色の指貫さしぬきとが一つずつあるのが、今ではそれが上白うわしろんで、藍あいとも紺とも、つかないような色に、なっている。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒おや菊綴きくとじの色が怪しくなっているだけだが、指貫になると、裾すそのあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴はかまもはかない、細い足が出ているのを見ると、口の悪い同僚でなくとも、瘦公卿やせくげの車を牽ひいている、瘦牛の歩みを見るような、みすぼらしい心もちがする。そ

れに佩はいてゐる太刀たちも、頗すこぶる覺束おぼつかない物で、柄つかの金具も如何いかがわしければ、黒鞆くろざやの塗ぬりも剥はげかかっている。これが例の赤鼻ねこぜで、だらしなく草履わらじをひきずりながら、唯ただでさえ猫背ねこぜなのを、一層寒空の下に背せぐくまっつて、もの欲ほしそうに、左右なごを眺ながめ眺ながめ、きざみ足あしに歩くのだから、通りがかりの物売りまで莫迦ばかにするのも、無理はない。現いまに、こう云う事ことさえあつた。……

或る日、五位が三条坊門しんせんえんを神泉苑しんせんえんの方かたへ行く所で、子供が六七人、路みちばたに集あつて、何かしているのを見た事ことがある。「こまつぶり」でも、廻まわしているのかと思おもつて、

後ろから覗いて見ると、何処どこかから迷って来た、彪犬むくいぬの首へ縄をつけて、打ったり殴たたいたりしているのであった。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せざる事があったも、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に現わしたことがない。が、この時だけは相手が子供だと云うので、幾分か勇気が出た。そこで出来るだけ、笑顔えがおをつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩たたいて、「もう、堪忍かんにんしてやりなされ。犬も打たれば、痛いでのう」と声をかけた。すると、その子供はふりかえりながら、上眼うわめを使って、蔑さげすむように、じろじろ五位の姿を見た。云

わば侍所の別当が用の通じない時に、この男を見るような顔をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれとうもない」その子供は一足下りながら、高慢な唇を反らせ^そて、こう云った。「何じや、この鼻赤めが」五位はこの語^{ことば}が自分の顔を打ったように感じた。が、それは悪態^{あくたい}をつかれて、腹が立ったからでは毛頭ない。云わなくともいい事を云って、恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顔に隠しながら、黙って、又、神泉苑の方へ歩き出した。後^{うしろ}では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べっかつこう」をしたり、

舌を出したりしている。勿論彼はそんな事を知らない。知っていたにしても、それが、この意気地のない五位にとつて、何であろう。……

では、この話の主人公は、唯、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持っていないかと云うと、そうでもない。五位は五六年前から芋粥いもがゆと云う物に、異常な執着を持っている。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛あまぎすいの汁で煮た、粥の事を云うのである。当時はこれが、無上の佳味かみとして、上は万乗ばんじょうの君きみの食膳しょくぜんにさえ、上せられた。従って、吾わが五位の如き人間の口へ

は、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさえ、飲めるのは僅わずかに喉のどを沾うるおすに足る程の少量である。そこで芋粥をあきる程飲んで見たいと云う事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になっていた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さえそれが、彼の一生を貫いている欲望だとは、明白に意識しなかつた事であろう。が事實は彼がその為に、生きていると云つても、差支さしつかえない程であつた。——人間は、時として、充みたされるか充みたされないか、わからぬ欲望の為に、一生を捧ささげてしまふ。その愚ぐを晒わらう者は、畢竟ひっきよう、人生

に對する路傍の人に過ぎない。

しかし、五位が夢想していた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事實となつて現れた。その始終を書こうと云うのが、芋粥の話の目的なのである。

或年の正月二日、基經の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。（臨時の客は二宮にぐうの大饗だいぎょうと同日に摂政関白家が、大臣以下の上達部かんだちめを招いて催す饗宴で、大饗

と別に變りがない。)五位も、外の侍たちにまじって、その残肴ざんこうの相伴しょうばんをした。当時はまだ、取食とりばみの習慣がなくて、残肴は、その家の侍が一堂に集まって、食う事になつていたからである。尤もつとも、大饗もつとに等しいと云つても昔の事だから、品数しなかずの多い割りに碌ろくな物はない、餅もち、伏菟ふと、蒸鮑むしあわび、干鳥ほしどり、宇治うじの氷魚ひお、近江おうみの鮎ふな、鯛たいの楚割すわやり、鮭さけの内子こごもり、焼蛸やきだこ、大海老おおえび、大柑子おおこうじ、小柑子ここうじ、橘たちばな、串柿くしがきなどの類たぐいである。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしている。が、何時も人数が多いので、自分が飲めるのは、いくらもない。それ

が今年は、特に、少かった。そうして気のせいか、何時もより、余程味が好いい。そこで、彼は飲んでしまった後のわん腕をしげしげと眺めながら、うすい口髭しづくについている滴しづくを、掌てのひらで拭ふいて誰に云うともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かのう」と、こう云った。

「大夫たゆう殿は、芋粥おわに飽かれた事がないそうな」

五位ごごの語ことばが完おわらない中に、誰かが、嘲笑あざわらった。鏗さびのある、鷹揚おうような、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃同じ基経かくごんの恪勤かくごんになっていた、民部卿みんぶぎょうとぎ時長ながの子藤

原利仁としひとである。肩幅の広い、身長みのたけの群を抜いた逞たくましい大男で、これは、焼栗やきぐりを噛かみながら、黒酒くろきの杯を重ねていた。もう大分だいぶん酔がまわっているらしい。

「お気の毒な事じやの」利仁は、五位が顔を挙げたのを見ると、軽蔑と憐憫れんびんとを一つにしたような声で、語を継いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申もらそう」

始終、いじめられている犬は、たまに肉を貰もらっても容易によりつかない。五位は、例の笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、利仁の顔と、空からの椀とを等分に見比べていた。

「おいやかな」

「……」

「どうじゃ」

「……」

五位は、その中うちに、衆人の視線が、自分の上に、集ま
っているのを感じ出した。答え方一つで、又、一同の
嘲弄ちようろうを、受けなければならぬ。或は、どう答えても、
結局、莫迦ばかにされそうな気さえする。彼は躊躇ちゆうちよした。
もし、その時に、相手が、少し面倒臭めんどうくさいそうな声で、「お
いやなら、たつてとは申すまい」と云わなかつたなら、

五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べていた事であらう。

彼は、それを聞くと、あわただ慌しく答えた。

「いや……かたじけの忝うござる」

この問答を聞いていた者は、皆、一時に、失笑した。

「いや……忝うござる」——こう云って、五位の答を、

まね真似る者さえある。いわゆる所謂、とうこうきつこう橙黄橘紅を盛ったくぼつき窪坏やたかつき高坏

の上に多くの揉烏帽子や立烏帽子が、たて笑声と共に一し

きり、波のように動いた。中でも、最、大きな声で、機

嫌よく、笑ったのは、利仁自身である。

「では、その中に、御誘い申そう」そう云いながら、彼は、ちよいと顔をしかめた。こみ上げて来る笑と今飲んだ酒とが、喉のどで一つになつたからである。「……しかと、よろしいな」

「忝うござる」

五位は赤くなつて、吃どもりながら、又、前の答を繰返した。一同が今度も、笑つたのは、云うまでもない。それが云わせたさに、わざわざ念を押し当の利仁に至つては、前よりも一層可笑おかしそうに広い肩をゆすつて、哄笑こうしょうした。この朔北さくほくの野人は、生活の方法を二つしか心得て

いない。一つは酒を飲む事で、他の一つは笑う事である。
 しかしさいわい幸に談話の中心は、程なく、この二人を離れ
 てしまった。これは事によると、外の連中が、たとい嘲
 弄にしろ、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるの
 が、不快だったからかも知れない。とにかく、談柄だんべいはそ
 れからそれへと移って、酒も肴さかなも残のこり少ずくなになった時分
 には、某なにがしと云う侍さむらい学がく生しょうが、行むか膝ばきの片皮かたがわへ、両足を
 入れて馬に乗ろうとした話が、一座の興味を集めていた。
 が、五位だけは、まるで外の話が聞えないらしい。恐ら
 く芋粥の二字が、彼のすべての思量を支配しているから

であろう。前に雉子きぎすの炙やいたのがあっても、箸はしをつけない。黒酒くろきの杯ひざがあっても、口を触れない。彼は、唯、両手を膝ひざの上に置いて、見合いをする娘のように霜に犯されかかった鬢びんの辺あたりまで、初心うぶらしく上気しながら、何時までも空になった黒塗の椀を見つめて、多愛たわいもなく、微笑しているのである。……

それから、四五日たった日の午前、加茂川かもがわの河原かわらに沿

っあわたぐちて、栗田口へ通う街道を、静に馬を進めてゆく二人の
 男があつた。一人は濃はなだい縹かりぎぬの狩衣に同じ色の袴をして、
うちで打出の太刀を佩はいた「鬚ひげ黒く鬢あおにびぐきよき」男である。も
 う一人は、みすぼらしい青鈍かっこうの水干に、薄綿きぬの衣を二つ
 ばかり重ねて着た、四十恰好かっこうの侍で、これは、帯のむす
 び方のだらしのない容子と云い、赤鼻はなでしかも穴のあた
 りが、洩はなにぬれている容子と云い、身のまわり万端つぎげのみ
 すぼらしい事おびただ夥おびただしい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛つきげ、
あと後のは蘆毛あしげの三歳駒さんさいごまで、道をゆく物売りや侍も、振向い
 て見る程の駿しゅんそく足である。その後から又二人、馬の歩み

に遅れまいとして随ついて行くのは、調度掛がけと舎人とねりとに相違ない。——これが、利仁としひとと五位との一行である事は、わざわざ、ここに断るまでもない話であろう。

冬とは云いながら、物静ほとりに晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲せんかんたる水の辺ほとりに立枯れている蓬よもぎの葉を、ゆるする程の風もない。川に臨んだ背の低い柳は、葉のない枝に飴あめの如く滑なめらかな日の光りをうけて、梢こずえにいる鶺鴒せきれいの尾を動かすのさえ、鮮かに、それと、影を街道に落している。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鵞絨ビロウドのようなな肩を、丸々と出しているのは、大方、比叡ひえいの山である

う。二人はその中に鞍くらの螺鈿らでんを、まばゆく日にきらめかせながら鞭むちをも加えず悠悠ゆうゆうと、粟田口を指して行くのである。

「どこでござるかな、手前をつれて行って、やろうと仰せられるのは」五位が馴なれない手に手綱たづなをかいくりながら、云った。

「すぐ、そこじや。お案じになる程遠くはない」

「すると、粟田口辺へんでござるかな」

「まず、そう思われたがよろしかろう」

利仁は今朝けさ五位を誘うのに、東山の近くに湯の湧わいて

いる所があるから、そこへ行こうと云って出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真まにうけた。久しく湯にはいらないので、体中がこの間からむず痒がゆい。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出来れば、願つてもない仕合せである。こう思つて、予あらかじめ利仁が牽ひかせて来た、蘆毛の馬に跨またがつた。所が、轡くつわを並べて此処ここまで来て見ると、どうも利仁はこの近所へ来るつもりではないらしい。現に、そうこうしている中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口では、ござらぬのう」

「いかにも、もそつと、あなたでな」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないようにして、静に馬を歩ませている。両側の人家は、次第に稀になって、今は、広々とした冬田の上に、餌えさをあさる鴉からすが見えるばかり、山の陰に消残って、雪の色も灰ほのかに青く煙っている。晴れながら、とげとげしい櫛はじの梢が、眼に痛く空を刺しているのさえ、何となく肌寒い。

「では、山科やましなへん辺でもござるかな」

「山科は、これじゃ。もそつと、さきでござるよ」
成程、そう云う中に、山科も通りすぎた。それ所では

ない。何かとする中に、関山せきやまも後にして、かれこれひる午少しすぎた時分には、とうとう三井寺みいでらの前へ来た。三井寺には、利仁の懇意こんいにしている僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐ひるげの馳走ちそうになった。それがすむと、又、馬に乗って、途みちを急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙はるかに人煙が少ない。殊ことに当時は盜賊が四方に横行した、物騒な時代である。——五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を見上げるようにして訊たずねた。

「まだ、さきでござるのう」

利仁は微笑した。悪戯をして、それを見つけられそう

になった子供が、年長者に向ってするような微笑である。鼻の先へよせた皺しわと、眼尻にたたえた筋肉のたるみとが、笑ってしまおうか、しまうまいかとためらっているらしい。そうして、とうとう、こう云った。

「実はな、敦賀つるがまで、お連れ申そうと思うたのじゃ」笑いながら、利仁は鞭を挙げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的てきれきとして、午後の日を受けた近江の湖みづうみが光っている。

五位は、狼狽ろうばいした。

「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越

前の——」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁ありひとの女婿じよせいになつてから、多くは敦賀に住んでいると云う事も、日頃から聞いていない事はない。が、その敦賀まで自分をつれて行く気だろ
うとは、今の今まで思わなかつた。第一、幾多さんかの山河を
隔てている越前の国へ、この通り、僅二人ともびとの伴人をつれ
ただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、
往来ゆききの旅人が、盜賊の為に殺されたと云う噂うわささえ、諸
方にある。——五位は歎願するように、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山じゃと心得れば、山科。山科

じやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一体どうしたと云う事でござる。始めから、そう仰せらりようなら、下人共なりと、召つれようものを。——敦賀とは、滅相な」

五位は、殆どべそを搔かないばかりになつて、眩いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇気を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ独りひと帰つて来た事であろう。

「利仁が一人居るのは、千人ともお思いなされ。路次の心配は、御無用じや」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉まゆを顰ひそめながら、嘲笑あざわらった。そうして調度掛を呼寄せて、持たせて来た壺胡籙つぼやなぐいを背に負うと、やはり、その手から、黒漆こくしつの真弓まゆみをうけ取って、それを鞍上あんじょうに横よこたえながら、先に立って、馬を進めた。こうなる以上、意気地のない五位は、利仁の意志に盲従するより外に仕方がない。それで、彼は心細そうに、荒涼とした周囲うちの原野を眺めながら、うろ覚えの観音経かんのんぎょうを口の中に念じ念じ、例の赤鼻を鞍の前輪まえわにすりつけるようにして、覚束ない馬の歩みを、不相変あいかわらずとぼとぼと進めて行った。

馬蹄ばていの反響はんきやうする野は、茫茫ぼうぼうたる黄茅こうぼうに蔽おほわれて、その所々みづたまりにある行みづたまり 潦みづたまりも、つめたく、青空を映したまま、この冬の午後を、何時かそれなり凍こつてしまふかと疑うたがわれる。その涯はてには、一帯の山脈が、日に背すむいているせいがか、かがやく可べき残雪の光もなく、紫がかつた暗い色を、長々となすっているが、それさえ蕭しょうじよう 条じようたる幾いくむら叢そうの枯薄かれすすきに遮られて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。

——すると、利仁が、突然、五位の方をふりむいて、声をかけた。

「あれに、よい使者が参まゐつた。敦賀への言ことづけを申まそ

う」

五位は利仁の云う意味が、よくわからなかったので、怖々こわごわながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるような所ではない。唯、野葡萄のぶどうか何かの蔓つるが、灌木の一むらにからみついている中を、一疋いっぴきの狐きつねが、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝さらしながら、のそりのそり歩いて行く。——と思う中に、狐は、慌ただしく身を跳おどらせて、一散に、どこともなく走り出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐おった。従

者も勿論、遅れてはいられない。しばらくは、石を蹴る
 馬蹄の音が、かつかつ蔓々として、こうや曠野の静けさを破っていたが、
 やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕えたの
 か、もう狐の後足をつか掴んで、さかさま倒に、鞍の側へ、からわらぶら
 下げている。狐が、走れなくなるまで、追いつめた所で、
 それを馬の下に敷いて、手取りにしたものである。五
 位は、うすい鬍にたまる汗を、あわただ慌しく拭きながら、ようやく漸、
 その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ」利仁は、狐を高く眼の前へつ
 るし上げながら、わざと物々しい声を出してこう云った。

「その方、今夜の中に、敦賀の利仁が館やかたへ参つて、こ
う申せ。『利仁は、唯今にわか俄に客人を具して下ろうとす
る所じや。明日みょうにち、巳時頃みのとき、高島の辺あたりまで、男たちを迎
いに遣つかわし、それに、鞍置馬くらおき二疋、牽かせて参れ』よい
か忘れるなよ」

云い畢おわると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの
叢くさむらの中へ、抛ほうり出した。

「いや、走るわ。走るわ」

やっと、追いついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方ゆくえ
を眺めながら、手を拍うつて囃はやし立てた。落葉のような色

をしたその獣けものの背は、夕日の中を、まっしぐらに、木の根石くれの嫌きらいなく、何処どこまでも、走って行く。それが一行の立っている所から、手にとるようによく見えた。狐を追っている中に、何時か彼等は、曠野が緩ゆるい斜面を作って、水の涸かれた川床かわどこと一つになる、その丁度上の所へ、出ていたからである。

「広量こうりょうの御使でござるのう」

五位は、ナイイヴな尊敬と讚嘆とを洩もらしながら、この狐さえ頤い使しする野育ちの武人の顔を、今更のように、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔がある

か、そんな事は、考える暇いとまがない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に包容される自分の意志も、それだけ自由が利きくようになった事を、心強く感じるだけである。——阿諛あゆは、恐らく、こう云う時に、最もつとも自然に生れて来るものである。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幫間ほうかんのような何物かを見出しても、それだけで妄みだりにこの男の人格を、疑う可きではない。

抛り出された狐は、なぞえの斜面を、転げるようにして、駈かけ下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、

ぴよいぴよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すじかに駈け上った。駈け上りながら、ふりかえって見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立っている。それが皆、指を揃えた程に、小さく見えた。殊に入口を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりもくつきりと、浮き上っている。

狐は、頭をめぐらすと、枯薄の中を、風のように走り出した。

一行は、予定通り翌日の巳時みのときばかりに、高島の辺あたりへ来た。此処は琵琶湖びわこに臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇った空の下に、幾戸の藁屋わらやが、疎まばらにちらばっているばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣漪さざなみをよせる湖の水面が、磨みがくのを忘れた鏡のよううに、さむざむと開けている。——此処まで来ると利仁が、五位を顧ごみて云った。

「あれを御覧ごらんじろ。男どもが、迎いに参ったげでござ

る」

見ると、成程、二疋の鞍置馬くらおきうまを牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨またがったのもあり徒歩かちのもあり、皆水干の袖そでを寒風に翻えして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで来る。やがてこれが、間近くなつたと思つたと、馬に乗つていた連中は、慌ただしく鞍を下り、徒歩かちの連中は、路傍みちばたに蹲踞そんぎよして、いずれも恭々うやうやしく、利仁の来るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますのう」
 「生得しょうとく、変化へんげある獣じやて、あの位の用を勤めるの

は、何でもござらぬ」

五位と利仁とが、こんな話をしている中に、一行は、郎等ろうどうたちの待っている所へ来た。「大儀じゃ」と、利仁が声をかける。蹲踞せむしていた連中が、忙しく立って、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽気になった。

「夜前、稀有けうな事が、ございましてな」

二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色ひわだの水干を着た、白髪の郎等が、利仁の前へ来て、こう云った。「何じゃ」利仁は、郎等たちの持って来た篠枝ささえや破籠わりごを、五位にも勧めながら、鷹揚に

問いかけた。

「さればでございませう。夜前、戌いぬのとき時ばかりに、奥方が俄にわかに、人心地をお失いなされましてな。『おのれは、阪本の狐じゃ。今日、殿の仰せられた事を、言伝ことづてしよ。うほどに、近う寄つて、よう聞きやれ』と、こよう仰有おっしやるのでございませう。さて、一同がお前に参りますると、奥方の仰せられますには、『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所じゃ。明日巳みのとき時頃、高島の辺あたりまで、男どもを迎いに遺わし、それに鞍置馬二疋牽かせて参れ』と、こよう御意遊ばすのでございませう」

「それは、又、稀有な事でござるのう」五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細しさいらしく見比べながら、両方に満足を与えるような、相槌あいづちを打った。

「それも唯、仰せられるのではございませぬ。さも、恐ろしそうに、わなわなとお震えになりましたな、『遅れまいぞ。遅れれば、おのれが、殿の御勘当をうけねばならぬ』と、しつきりなしに、お泣きになるのでございませぬ」

「して、それから、如何いかがした」

「それから、多愛たわいなく、お休みになりましたな。手前共

の出て参りまする時にも、まだ、お眼覚にはならぬよう
で、ございました」

「如何でござるな」郎等の話を聞き完おわると、利仁は五
位を見て、得意らしく云った。「利仁には、獣けものも使わ
れ申すわ」

「何とも驚き入る外は、ござらぬのう」五位は、赤鼻を
搔きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざと
らしく、呆あきれたように、口を開あいて見せた。口髭には、
今飲んだ酒が、滴しずくになつて、くつついている。

その日の夜の事である。五位は、利仁の館やかたの一間に、切燈台きりとうだいの灯を眺めるともなく、眺めながら、寝つかれない長の夜をまじまじて、明あかしていた。すると、夕方、此処へ着くまでに、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木この葉、石、野火の煙のにおい、——そう云うものが、一つずつ、五位の心に、浮んで来た。殊に、雀色すずめいろどき時の靄もやの中を、やつと、この館へ辿たどりついて、長櫃ながびつに起してある、炭火の

赤い焰ほのおを見た時の、ほっとした心もち、——それも、今こうして、寝ていると、遠い昔にあった事としか、思われぬ。五位は綿の四五寸もはいつた、黄いろい直垂ひたたれの下に、楽々と、足をのばしながら、ぼんやり、われとわが寝姿を見廻した。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色ねりいろの衣きぬの綿厚わたあのを、二枚まで重ねて、着こんでいる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯ゆうめしの時に一杯やった、酒の酔えいが手伝っている。枕元の蔀しどみ一つ隔てた向うは、霜の冴さえた広庭だが、それも、こう

陶然としていれば、少しも苦にならない。万事が、京都の自分の曹司ぞうしにいた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも係わらず、我五位の心には、何となく釣合つりあいのとれない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けると云う事が、——芋粥を食う時になると云う事が、そう早く、来てはならないような心もちがする。そうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋こくし合あう後うしろには、境遇の急激な変化から来る、落着かない気分が、今日の天気のように、うすら寒く控えている。それが、皆、邪魔になつて、折

角の暖かさも、容易に、眠りを誘いそうもない。

すると、外の広庭で、誰か大きな声を出しているのが、耳にはいった。声がらでは、どうも、今日、途中まで迎えに出た、白髪の郎等が何か告つげられているらしい。その乾ひからびた声が、霜に響くせいか、凜りん々としてこがらし凜こがらしのようこがらしに、一語ずつ五位の骨に、応こたえるような気さえする。

「この辺あたりの下人、承あわれ。殿の御意遊あばさるるには、明朝、卯時うのとまでに、切口きりくち三寸、長さ五尺の山の芋を、老若各おのおの、一筋ずつ、持って参る様にとある。忘れまいぞ、卯時までにじや」

それが、二三度、繰返されたかと思うと、やがて、人のけはいが止んで、あたりは忽たちまち元のようになり、静かな冬の夜になった。その静な中に、切燈台の油が鳴る。赤い真綿のような火が、ゆらゆらする。五位は欠伸あくびを一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量ふけに耽り出した。

——山の芋と云うからには、勿論芋粥にする気で、持っ
て来させるのに相違ない。そう思うと、一時、外に注意
を集中したおかげで忘れていた、さっきの不安が、何時
の間にか、心に帰って来る。殊に、前よりも、一層強くな
ったのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと言ふ

心もちで、それが意地悪く、思量の中心を離れない。どうもこう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待っていたのが、如何いかにも、無駄な骨折のように、見えてしまう。出来る事なら、突然何か故障が起つて一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとこれにありつけると云うような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。——こんな考えが、「こまつぶり」のように、ぐるぐる一つ所を廻つている中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐっすり、熟睡してしまった。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、
 気になるので、五位は、何よりも先に部屋の蔀しとみをあげ
 て見た。すると、知らない中に、寝すごして、もう卯時
 を過ぎていたのであろう。広庭へ敷いた、四五枚の長筵ながむしろ
 の上には、丸太のような物が、凡そ、二三千本、斜ななめに
 つき出した、檜皮葺ひわだぶきの軒先へつかえる程、山のように、
 積んである。見るとそれが、悉ことごとく、切口三寸、長さ五
 尺の途方もなく大きい、山の芋であつた。

五位は、寝起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い
 驚愕きょうがくに襲おそわれて、呆然ぼうぜんと、周囲を見廻した。広庭の所々

には、新しく打つたらしい杭くいの上に五斛納釜ごくのうがまを五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖あおを着た若い下司女げすが、何十人となく、そのまわりに動いている。火を焚たきつけるもの、灰を搔くもの、或は、新しい白木しらぎの桶おけに、「あますらみせん」を汲くんで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまわる程忙しい。釜の下から上る煙と、釜の中から湧く湯気とが、まだ消え残っている明方の靄もやと一つになつて、広庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩こめた中で、赤いのは、烈々と燃え上る釜の下の焰ばかり、眼に見るもの、耳に聞くものうとこと、悉く、

戦場か火事場へでも行ったような騒ぎである。五位は、
 今更のように、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納
 釜の中で、芋粥になる事を考えた。そうして、自分が、
 その芋粥を食う為に京都から、わざわざ、越前の敦賀ま
 で旅をして来た事を考えた。考えれば考える程、何一つ、
 情無くならないものはない。我五位の同情すべき食欲は、
 実に、此時もう、一半を減却してしまつたのである。
 それから、一時間の後、五位は利仁やしゅうと舅の有仁と共
 に、朝飯あさめしの膳に向つた。前にあるのは、銀しろがねの提ひさげの一
 斗ばかりはいるのに、なみなみと海の如くたたえた、恐

るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃うすばを器用に動かしながら、片端から削るように、勢よく切るのを見た。それからそれを、あの下司女たちが、右往左往に馳はせちがって、一つのこらず、五斛納釜へすくっては入れ、すくっては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなった時に、芋のにおいと、甘葛あまずらのにおいとを含んだ、幾道いくどうかの湯気の柱が、蓬々然ほうほうぜんとして、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上って行くのを見た。これを、目まのあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に

対した時、まだ、口をつけない中から、既に、満腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であろう。——五位は、提を前にして、間の悪そうに、額の汗を拭いた。

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上って下され」

舅の有仁は、童児たちに云いつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れあふんばかりにはいつている。五位は眼をつぶって、唯でさえ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器かわらけにすくって、いやいやながら飲み干した。

「父も、そう申すじやて。平ひらに、遠慮は御無用じや」
利仁も側から、新あらたな提をすすめて、意地悪く笑いな
がらこんな事を云う。弱ったのは五位である。遠慮のな
い所を云えば、始めから芋粥は、一いちわん碗も吸いたくない。
それを今、我慢して、やっと、提に半分だけ平げた。こ
れ以上、飲めば、喉のどを越さない中にもどしてしまふ、そ
うかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無に
するのも、同じである。そこで、彼は又眼をつぶつて、
残りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸
いようがない。

「何とも、かたじけの忝うづござった。もう十分頂戴致したて。

——いやはや、何とも忝うづござった」

五位は、しどろもどろになって、こう云った。余程弱
 ったと見えて、口髭にも、冬とは思われない程、汗が玉
 になって、垂れている。

「これは又、御少食じや。客人は、遠慮をされると見え
 たぞ。それぞれその方ども、何を致して居る」

童児たちは、有仁の語につれて、あらた新あらたな提あの中ちから、

芋粥を、土器に汲もうとする。五位は、両手をはえ蠅はえでも逐
 うように動かして、平ひらに、辞退の意を示した。

「いや、もう、十分でござる。……失礼ながら、十分でござる」

もし、この時、利仁が、突然、向うの家の軒を指して、「あれを御覧ごうろじろ」と云わなかつたなら、有仁は猶なお、五位に、芋粥をすすめて、止まなかつたかも知れない。が、幸いにして、利仁の声は、一同の注意を、その軒の方へ持って行った。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしている。そうして、そのまばゆい光に、光沢つやのいい毛皮を洗わせながら、一足の獣けものが、おとなしく、坐っている。見るとそれは一昨日おととい、利仁が枯野の路で手捕りにした、

あの阪本の野狐であつた。

「狐も、芋粥が欲しさに、見参けんざんしたそうな。男ども、しやつにも、物を食わせてつかわせ」

利仁の命令は、言下ごんかに行われた。軒からとび下りた狐は、直ただちに広庭で芋粥の馳走に、与あずかつたのである。

五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此処へ来ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。

それは、多くの侍たちに愚弄ぎよろうされている彼である。京童きやうわらべにさえ「何じや。この鼻赤めが」と、罵ののられている彼である。色のさめた水干に、指貫さしぬきをつけて、飼主のない

尨犬むくいぬのように、朱雀大路すざくをうろついて歩く、憐あわれむ可き、孤独な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云う慾望を、唯一人大事に守っていた、幸福な彼である。

——彼は、この上芋粥を飲まずにすむと云う安心と共に、満面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのを感じた。晴れてはいても、敦賀の朝は、身にしみるように、風が寒い。五位は慌くさめてて、鼻をおさえると同時に銀しろがねの提ひしに向って大きな嚏くさめをした。

日本文学電子図書館

羅生門・鼻

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社
昭和43年7月20日発行



日本文学電子図書館